


## 青少年教育に関するモデル的プログラムの開発

事業名	無人島アドベンチャーキャンプ2011 ～電気がなくても、トイレがなくても、仲間がいれば生きていける～	
実施期間	平成23年8月8日（月）～11日（木）	
担当者	企画指導専門職 赤嶺 智郎	

### I 事業の趣旨

小中学生異年齢のグループが、無人島において「不便」「不足」「不自由」な中で「生きる」ための自然体験を行い、それを乗り越えることで、「自分の力で生きていける」という自信を持たせたい。また、その過程で仲間と話し合い、助け合い、知恵を出し合う中で、仲間の大切さや規範意識、社会性、主体性を育成するとともに、慶良間の豊かな自然の素晴らしさを体感するような展開を図る。

### II 事業の概要

#### 1 事業の目的

子どもたちが「生きる」ための様々な体験から、自分への有能感を高め、自然の雄大さや、仲間の大切さを実感させることをねらいとする。

#### 2 参加対象及び募集人員

小学校5年生～中学3年生 20名  
(小10名、中10名：男女半々)

#### 3 参加状況 19名

小学生11名、中学生8名  
(応募者270名：選考実施)

#### 4 実施上の留意事項

- (1) 無人島での活動を班ごとで話し合い、創意工夫を生かした活動ができるようにする。
- (2) 参加児童・生徒の安全を確保し、基礎的な野外活動技能は教えるが、活動はできるだけ子ども達を主体とする。

- (3) 公立教育施設等への普及を踏まえたプログラム開発を念頭に置いて企画立案を行い、県立の教育施設職員との連携強化を図る。  
(県立教育施設職員をスタッフとする)

#### 5 引率

- ・青少年の家：4人
- ・全体カウンセラー：2人  
自然体験活動の専門家
- ・県立教育施設職員：2人  
(石垣青少年の家、糸満青少年の家)
- ・養護担当：小学校養護教諭
- ・アシスタント：2人(筑波大学実習生)

#### 6 活動の様子

1日目<8月6日(月)>

★儀志布島へ

出会いから生活基盤づくり



《初対面の仲間と勇気を出して紹介：渡嘉敷港》



《悪天候でカヌーから船に変更し儀志布島へ》



《1人1枚のブルーシートを使って家造り》



《できあがったテントの前でポーズ》



《初日の夕飯》  
全体炊飯

2日目<8月7日(火)>  
★生きるためのスキル練習  
スノーケリング、釣り



《仲間と力を合わせてスノーケリング準備》



《中学生のお兄さんに甘える小学生》



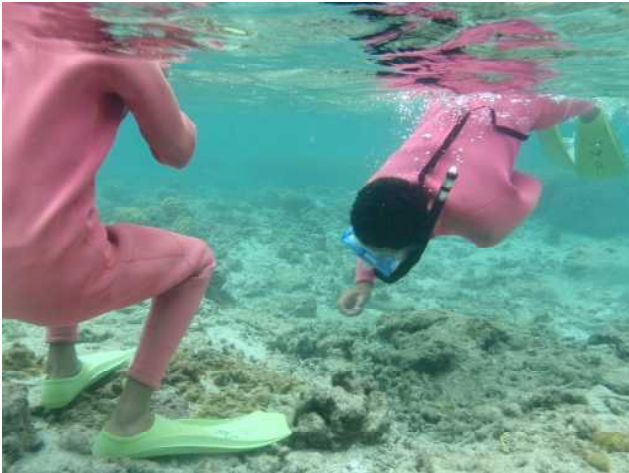
《魚とったどー》



《手作りかまど  
で調理》

3日目<8月8日(水)>

★追いこみ漁、分かち合いの集い



《追いこみ漁は、仲間の息を合わせるのが大事》



《1人1匹さばきます》



《苦労したけれど見事にさばくことが出来た》



《分かち合いの集い》  
ちらし寿司と魚汁→



《火を囲んでふりかえり》

4日目<8月11日(木)>

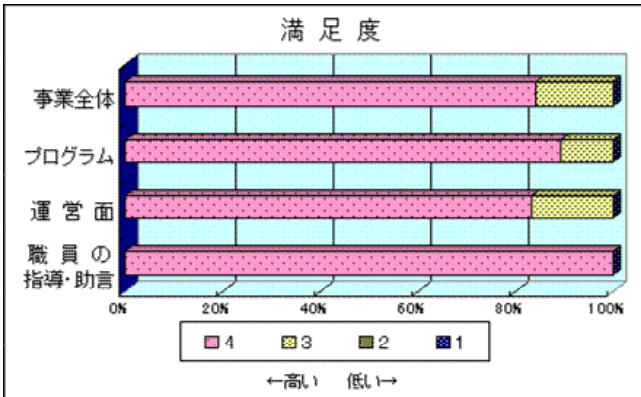
★片づけ、儀志布→渡嘉敷→泊港



《保護者への報告会：泊港》

## 6 アンケートの結果

### (1) 満足度



### (2) 参加者・保護者の声

#### <良かった点>

○いつもある電気やもの、水がなくなると、その代わりになるものを集めて過ごした。その代わりにものが、海水だったり竹だったり、身近にあることに気付いた。

○サバイバルの中では生活の中で出なかったアイデアがでて面白かった。自然と一体化することで協力性も高まるし、良い思い出が作れ友達も増え、これからの生活の中でも知恵を生かしていきたい。

○計画的にできたし、みんなが協力して一つになったから、無人島でも何もかもうまく成功することができて、本当に楽しかった。

○魚をさばいたりして、かわいそうだと思ったけど、生きるためだから仕方ないと思った。やっぱり有難い。来年も来たい。

#### <保護者のメールより>

○渡嘉敷島の武勇伝を毎日のように聞かされ、ほんとかな?と思う事ばかりで驚いていますが、家族で食い入るように聞いています。たくましく自信に満ちあふれています。翌日朝、自分から進んで家族みんなの布団を丁寧にたたんでいました(驚)

ただ…お風呂に入らなくても生きていけると思っっているようです。帰ってから当たり前的事すべてにおいて感動していました。

#### <改善すべき点>

▲お風呂は入りたかった。

▲もっと海での遊びを取り入れたら良い。

## Ⅲ 成果と課題

### 1 事業の成果

(1) 無人島の「生きる」ための様々な体験が、参加者の有能感を高めることができた。

(2) 異年齢・男女混成の班編成で4日間楽しく協力しながら生活したことで、仲間の大切さを実感させることができたと考える。

(3) 儀志布島の素晴らしい自然の中で魚を捕ったり、満天の星を眺め生活したことで、自然の雄大さを実感させられたと考える。

(4) 事業中の様子を写真付きメールで送ったり、泊港で報告会を行ったことで、保護者も一緒に無人島生活の体験や感動を共有することが出来、家庭でのふりかえりに役立った。

### 2 今後の課題

(1) 台風で日程を変更して行ったが、予備日を設定していなかったため、参加できない子やスタッフが出た。来年度は、予備日を設定して計画する。

(2) 申し込みが270名余りあり、受付業務が大変であった。来年度は受付方法や人数等を考慮したい。

(3) 生活基盤や技能伝達に費やす時間が多く、参加者にゆだねる時間が少なかった。健康状態も考慮し日程延長を検討していく。

## Ⅳ おわりに

初めて参加者を小中学生にしての無人島キャンプであったが、参加者は常に前向きに、不便・不足・不自由を楽しみながら生活し、逞しくなった。

男女混成の異年齢グループでの生活で、中学生をリーダーに班で協力し兄弟・姉妹のように仲良くなっていく様子が見受けられた。

彼らにとって一生忘れられない貴重な、そして生きる自信となる体験であったと考える。